

PHOTO JOURNAL

2013 SUMMER



写真で歩く世界の都市 BERLIN

ベルリンが写真の街としてにぎわい始めたのは、比較的最近のこと。それは、街の数奇な歴史の経緯と無縁ではない。分断の歴史を持つベルリンの過去と現在。それがいま、写真を通して見えてくる。

歴史の影が色濃く落ちる都市と写真の関係

ベルリンの近現代史には二つの分断がある。ひとつはナチス政権時代の12年間。そしてもうひとつは、40年間にわたる東西ドイツ分断の歴史だ。この歴史的事実がこの街のアート史、そして写真史に落としている影は大きい。1920年、ベルリンで生まれた現代写真の巨匠、故・ヘルムート・ニュートンは、ユダヤ系であったため亡命を余儀なくされ、名声を得てからベルリンに戻ってくるまで、この二つの分断の時代が過ぎるのを待たなければならなかった。

ドイツ統一後、ベルリンは首都に再び咲き、政治の中心地がこの街に戻ってきた。「世界最大の工事現場」と呼ばれたこの街のめまぐるしく変化する様子は多くの若者を、そしてアーティストおよび写真家を引きつけた。1990年代後半以降、名門ギャラリーがそれまでアートと写真ギャ

ラリーのメッカだったケルンからベルリンへの移転を始める。1997年には「カメラ・ワーク」がベルリンに設立され、2000年には写真ギャラリーとして25年の歴史を持つ「キッケン」がケルンからベルリンに移ってきた。そしてドイツ統一10年を機に、同年にベルリンで開催された「マグナム」の回顧展が開催される。手がけたのは大型ミュージアムではなく、フォトグラファーとデザイナー、建築家のオーナー3人によって設立されたカルチャーフォーラム「C/O Berlin」だった。

この間、世の中では何が起こっていただろうか？ インターネットが世界的に普及し、写真の世界にも急速にデジタル化が広がっていった。歴史はいつも同時性をもって進行する。ベルリンの過去数十年の歴史を振り返るだけで、決して人間の意思のみでは動かし得ない、神の手によって導かれる歴史の不思議を感じずにはいられない。そんな歴史に翻弄された街を「写真」を通して味わってみたい。

見市 知、荒井 剛＝取材・文 峯岸進治＝写真

Text: Tomo Miichi, Tsuyoshi Arai Photos: Shinji Minegishi Map: Kenji Oguro

